

(第2回)

哲学社会科学編『北京大学学報』1974年第6号所収

儒法闘争史概況 (初稿)

北京大学儒法闘争史編集グループ

翻訳 依田 憲家

(四) 明清時代の儒法闘争

元末の農民大蜂起が元王朝を打倒すると、もと農民蜂起軍の指導者であった朱元璋が政権を得て、明王朝をたてた。明から清の中葉のアヘン戦争の勃発(1368-1840年)までのこの歴史的時期は、中国の封建社会はすでに後期に入り、階級闘争と民族闘争の形勢に、新しい変化が生まれた。土地集中はいよいよ激化し、封建支配階級の農民に対する搾取と圧迫は日ましに重くなり、農民の革命闘争の発展も1つの新しい段階にいたった。闘争のはこ先は封建制度の根本に向けられ、封建的土地所有制に反対し、封建の分配関係に反対し、封建的人身隷属制に反対した。商品経済の発展にともない、明の中期より資本主義の萌芽が現れた。都市の市民は、商工業者と手工業労働者も含んで反封建闘争の隊伍に加った。明の中期以後、ヨーロッパの早期植民主義者ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスなどの海賊商人と宣教師は前後して中国に来て、種々の略奪と侵略活動を行った。清初、北方の帝政ロシアも侵略の魔手を黒竜江流域にのぼし、不断に中国の土地を略奪した。

明清の時期に、儒法闘争は新しい情勢の下でひきつづき行われた。この時期の階級闘争と民族闘争の情勢が提出した主要な問題は次のようなものである。(1)多民族国家の統一を擁護するか又は多民族国家の統一をおびやかすか。外国の植民主義者の侵入に対し、抵抗するか又は妥協投降するか。(2)生産を発展させ商工業を発展させるか、生産を

阻碍し商工業を圧迫するか。(3)社会的生産力の発展を厳しくさまたげている腐りはてた政治経済制度に対し、改革を行うか、改革に反対するか。(4)思想戦線上においては、官学の哲学である程朱の理学を暴露し批判するか、程朱の理学を擁護するか。明清時代の儒法闘争は、これらの問題をめぐって展開したのであった。

明の太祖朱元璋は有能な地主階級の政治家であり、統一した封建国家を再建した後、法家の路線を実行し、中央と地方の政治機構をいっそう整備し、中央集権を強化した。元来の農民蜂起は蒙古貴族と漢族地主に重大な打撃を与えた。多くの貴族や地主は、圧迫されたり、逃げ出したりしたので、彼らがもともと占有していた土地は無主の荒田となったので、大部分は農民によって開墾された。明朝の建立後、地主階級はただちに反撃を開始し、一部分の土地を奪い取ったが、一部分の土地は農民の手にあった。明初の農業、手工業生産の恢復と発展は、再び農民蜂起の封建社会の生産力の発展に対する巨大な推進作用を示した。朱元璋は封建政府の財政難を解決するため、農民を土地にしばりつけ、開墾の奨励、移民屯田等の政策を実行した。彼は水利の開発や修理、農業技術の発展に比較的注意をはらったが、これは生産の発展にとって有利であった。

但し、封建支配者の生産発展の根本の目的は、封建国家の租税収入の増加にあり、まさにエンゲルスの指摘しているように、階級対立の社会にお

いては、「生産の発展は、同時に被圧迫階級すなわち大多数の人の生活状況の退歩でもある。一部の人にとって良いことは、他の人々にとって必然的に悪いことである」(「家族、私有財産および国家の起源」)。地主階級の農民に対する搾取が日ましに強化されるにしたがい、土地はますます地主の手に集中し、農民はますます土地を失った。明朝の中期、官僚大地主の土地集中はすでに極めて重大な地歩を占めるようになった。弘治15年(1502)と明初の洪武26年(1393)を比較すると、税田の総額は850万余頃から422万余頃に降り、半分以上減少している。このことは、多くの耕地が特権階級の所有に帰し、納税されなくなったことを説明している。但し封建国家の税收総額は減少せず、少なからぬ苛酷な雑税は増加し、農民の負担はおおいに加重されたのである。土地の日ましの集中、政治の極端な腐敗化、租税や徭役のたえざる加重化の状況の下に、農民は大量に流亡し、生きてゆくことができなくなった。封建支配階級と農民の矛盾はいっそう激化した。大規模な農民蜂起がたえず発生した。農民蜂起は豪族地主に打撃を与えたばかりでなく、孔孟の道をはげしく掃蕩した。明の中期の劉六、劉七の指導する農民蜂起軍は、1511年(正徳六)に孔老二の古巣曲阜を攻撃し、孔府の廟宇を打ちこわし、孔廟の祭器を破壊し、孔府の「聖地」を馬小屋にし、孔老二の「聖經」をこえだめにたたきこみ、農民大衆は封建社会の反孔の主力軍であることをはっきりと表明した。

農民蜂起と農民の反孔闘争は、封建支配者を政治支配の危機に追いつめただけでなく、思想支配の危機にも直面させた。彼らの一部は程朱派のような客観的唯心主義の形式で孔孟の道を鼓吹した理学では効果がないと感じ、また様子を変え、主観主義の形式によって孔孟の道を鼓吹し、その反動的政治路線に奉仕しようとした。農民革命軍虐殺の死刑執行人であり、反動的道学家の王守仁

(1472-1528年)の主観的唯心主義の「心学」は、官僚大地主階級のこのような要求によって生まれたものであった。

王守仁は王陽明ともよばれ、孔老二の忠実な信徒であった。彼は当時の社会的変化と新しく生まれた事物を深くにくみ、「功利の毒」がすでに「人の心髓」にしみこんでいる、「ああ、悲しむべきのみ」(「伝習録・答顧東橋書」)と絶叫した。これは官僚大地主階級の封建制度の没落に対して発したところの悲鳴であった。但し、彼は歴史上の反動派と同じように、失敗にこりず、何とかして「先王の道を挽回」しようとした。彼は農民蜂起を弾圧した生涯のうち、一連の反革命の経験を総括し、「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」(「与楊士德薛尚誠」)とのべた。このため、彼は武力によって農民を殺戮すると同時に、全力をあげて儒家思想を宣伝し、勤労人民の革命思想を消滅させ、革命的農民と封建制度に背くすべての言論を根絶させようとしたのである。彼は孟軻の人は「不慮にして知る」ところの「良知」をそなえているという唯心主義的先験論から出発し、宋代の道学家陸九淵(朱熹と同時代の人)の「心は即ち理なり」の思想を継承し、「致良知」と「知行合一」の「心学」体系をねりあげた。彼のいう「良知」とは、「三綱五常」の封建的教条こそは人心固有のものとし、ひとびとはただ内に反省し、「人欲」をなくすれば、良知は十分に発揮することができ、「聖人」となるということであった。「天理存りて、人欲を滅す」という反動的説教を推行するため、彼は「知行合一」は「致良知」の方法の一つであるとした。彼は、「今の人の学問は、只だ知と行を分って兩件と作すの故に、一念発動して、これ不善なりと雖も、然るに却っていまだかつて行はざれば、去きて禁止せず。われ今この知行合一を説くは、まさに人に一念の発動する処は、すなわち即ちこれ行へることなるを曉得し、発動する処に不善あらば、すなわちこの不善の念

を克倒するをもとめ、徹根徹底し、かの一念の不善をして胸中に潜伏せしめんとす。此はこれわが立言の宗旨」(「伝習録」下)とのべている。あきらかに、彼のいう「行」とは、ただ人の心の意で、もとより実践活動ではない。彼は「致良知」、「知行合一」を提出したが、このような唯心主義の修養経を用いて、農民の革命反抗の念を消し、都市平民の封建的圧迫に反対する要求を消し去ろうとしたものである。王守仁というこの大地主階級の代言人は、孔学によって封建制度の没落を挽回する屠刀をきたえようとしたが、これは完全に幻想であった。封建制度の盛期はすでに去って再びかえらなかった。王守仁のこのような唯心主義の修養経は、後代の反動支配者にたっとばれた。裏切者、スパイ、労働貴族の劉少奇も、農民と地主、革命と反革命の区別は「一念の差」によるとでたらめをまきちらし、この種の唯心主義の説教によって、地主ボス、裏切者、売国奴の罪行を弁護しようとした。裏切者、売国奴、林彪は「私字の一念と狼闘(はげしく闘う)」しなければならないとおおいに宣伝し、成功可否かは「一念の差」によるものといいたてた。劉少奇一味のペテン師も王守仁の「知行合一」を、「弁証法」思想であるかのように公然と宣伝した。しかし、社会主義がいたるところで勝利のうちに前進している偉大な新しい時代においては、孔孟の道が亡霊の助けをかりて復活しようとしても、さらにみじめな失敗をなさざるをえなかったのである。

農民蜂起は官僚大地主頑固派の思想支配の形式を変えさせたばかりでなく、同時に地主階級の革新派が法家路線を行い、社会改革を進めるのを促進した。張居正(1525-1582年)は当時の地主階級革新派の代表であった。張居正の生活した時代は、明の中期の何回にもわたる大規模な農民蜂起が過ぎ去ったばかりの小規模な農民蜂起と市民闘争が不断に発生していた時代であった。彼は農民蜂起は、「飢寒に迫られ」たものであり、

豪族大地主の土地集中によっておこったものであり、豪強を抑えれば(「私門を杜し」)、社会は安定すると考えた。張居正は当時の農民蜂起と市民闘争の影響の下に、法家の思想を運用し、官僚大地主頑固派の反動路線を批判し、一連の改革を積極的に進めた。

改革を進めるための世論を造るために、張居正は儒家の復古逆行の反動理論を痛烈に批判し、昔よりも現在を重んずることを主張し、公然と孟軻の「先王を法す」を批判し、荀況の「後王を法す」を肯定した(「張文忠公文集」巻三)。彼は「天下の事、極まれば必ず変ず」(「文集」巻11)とし、ただ形勢の変化にしたがい、旧制度を改革してこそ、出路があるとした。彼は「法に古今なし、惟うにその時の宜しきところ」(同上)とし、当時の情況にしたがって立法することを主張した。彼は歴史事実を運用して法治の必要性を実証し、周朝のような礼治も、春秋戦国時代になると、すでに時代おくれになってしまい、秦の始皇帝が法治を進めることによって中国を統一したのは歴史発展の必然的な趨勢であり(「周の王道の窮まるや、その勢必ず変じて秦となる」)、秦の始皇帝が「立法を創制」したのは「渾沌の再辟」であり、天地創造の大事件であり、ひとびとは今にいたるもその余恵を受けていると指摘した。彼は、漢初においてはひきつづき法治が行われ、国家は富強となったと指摘している。しかし漢の元帝、成帝の時代になると、儒術を尊び、おおいに礼治をおこし、ここにおいて社会の風潮はますます虚構の礼義にたよるようになり、特に宋末においては、社会の風潮は極端に頹廢したのである。彼は明の太祖が法治を引きつぎ、前代の「繁文苛礼」を全てのぞき、以後明朝ははじめて強勢になったとかんがえた。この点から彼は、およそ礼治をもちあげ、仁政を講ずるものは、「必ず国を亡す」(以上「文集」巻11)ものと結論した。張居正のこのような評論は、秦の始皇帝が法治を進めることによ

て中国を統一した歴史的功績を高く評価し、ほこを返して尊儒反法派の秦の始皇帝に対する攻撃を批判したもので、封建後期の儒法闘争において重要な意義をもっていた。当時王守仁学派を代表とする道学家は、講学にかこつけて、いたるところで「先王を法す」、「三代を称す」を鼓吹し、昔をたたえ、今を非とし、革新に反対し、歴史の前へ向っての発展を阻止しようとしていた。張居正は、これらの道学家を「腐儒時の変に達せず」とし、彼らの鼓吹する「先王を法す」とは宋朝の投降派の古くさいやり方をくりかえそうとするものであると痛烈に批判した（「宋時の奸臣の売国の余習、老儒臭福これを遷して談ず」「文集」巻11）。

張居正は明代地主階級の有能な政治家であった。彼は「主権を尊び、公室を強む（中央政府を強化する）、私門を抑え（豪族を抑える）」の方針を提出し、宰相の在任中は、法家の学説によって一連の改革を行った。たとえば、全国の土地を測量し、大地主が隠とくしていた庄田を調査し、豪族を抑え、税制を改革して「一条鞭法」を施行し、1人あたりで徴収していた労役の1部を土地に応じて徴集するようにあらため、食糧の現物税であろうと労役であろうと、大部分を銀で徴集するように改め、「農を厚くして商に資す」、「商を厚くして農に利す」との、農業の発展と同時に商工業を進展させる政策を提出した。軍事上においては、彼は戚繼光などの將軍を派遣して北方に駐屯させ、積極的に兵を練り、屯田生産を行い、防御工事を行い、蒙古貴族と女真貴族の侵攻を防いだ。これらの改革はすべて一定の効果をあげた。当然、張居正の実行した「一条鞭法」などの改革処置は、実質上は地主階級の根本的利益を擁護するものであり、人民の負担を軽減するものではなかった。それなのに張居正の改革は、腐朽した勢力の頑強な抵抗を受けた。彼の執政期間に、大地主頑固派は彼を暗殺しようとしたが、彼は屈せず、一貫して闘争を堅持した。張居正の死後まもなく、大地

主頑固派は新政に対する反撃を行い、「もっぱら覇術に任ず」、「専恣にして権をほしいままにす」などの罪名で、張居正の家を没収したのである。これは大地主尊孔反法派の革新勢力に対するもう1つの報復であった。

明代の支配者がおおいに儒家をもちあげ、宋の明道学が支配的地位を占めていた状況の下で、李贄（1527—1602年）はひとり尊法の旗を高くかかげ、反孔の戦場にはせ参じた明末の法家思想家であった。彼は張居正を非常に尊敬し、張居正は「宰相の傑」であり、学ぶにたる手本であるとした。彼は農民蜂起とは封建支配者の責任によりおこったものと考えた（「豪傑の不平の恨を抱き」、「真にこれを駆りて盗となす」、「焚書・因記往事」）。彼はまた農民蜂起と市民闘争の影響の下に、尊法反孔の道を歩んだ。

李贄は歴史上の法家の人物—先秦の呉起、商鞅、荀況、韓非、李斯より漢代の劉邦、賈誼、晁錯、漢の武帝、桑弘羊、三国の曹操、諸葛亮、唐代の武則天、柳宗元など—についてはだいたい肯定的な評価を与えている。彼は特に秦の始皇帝の中国統一の歴史的功績を高く評価し、秦の始皇帝を「千古の一帝」（「蔵書・世紀列伝総目」）と称した。彼は道学家の法家の学説に対する攻撃を何回も反ばくし、法家は学も術もあり、功績もあり、国家を富強にしたことはうたがいないが、それに反して、孟軻は三代をたっとび、法家を誹謗するが、それは「舛謬（あやまり）通ぜざるの甚しきなり」（「蔵書・孟軻」）と指摘している。彼は、先王の足跡は早くも消滅しているので、ひとびとはそれをまねする必要もなく、まねしてはならないのであり、まねしようとするならば、足跡のないもののまねをすることになる、とのべている。同様に、孔丘の足跡もどのようなものであるのかしたかうべきものがないので、「一步一趨、孔子無足の法におく」（「蔵書・王通」）ような人は、実際上は盲従的な復古狂にすぎないとした。このこと

は、李贄の尊法は革新的なものであり、前進的なものであり、官僚大地主頑固派の守旧、逆行に反対したものであることをはっきりと知ることができる。

李贄ははげしく孔学を批判し、道学家の尊孔論を批判した。彼は、孔学とは「無学無術」（「焚書・答耿中丞」）の代名詞であり、学ぶにあたえないものであり、彼らは暗夜に「一犬影に吠えれば、群犬声に吠え」るように、無意味なものにくっついていて1群にすぎないと指摘した。彼は、1つの時代にはその時代の是非の標準があり、時代が異っているのに「孔子の是非を是非とする」のは真の是非とはいえないと考えた。彼は、「論語」、「孟子」および「六経」は孔子や孟子の弟子や孫弟子たちの竜頭蛇尾の筆記にすぎず、ほとんど臣下が君主を賛美したものにならず、少しの価値もないものであるとし、「あによって以て万世の至論と為すべきや」（「焚書・童心説」）と指摘している。彼は道学家の「天理存し、人欲を滅す」という反動的説教を批判し、「衣を穿き飯を吃するはこれ人倫物理」（「焚書・答鄧石陽」）と指摘し、さらに、道学家は「口に道德を談ずるも」、「志は巨富に在る」もので、「儒服を着た1群の豚や犬」であると暴露し、孔老二も頭は「私心」に満ちた富貴を求める者としている。これは反動的な道学の虚偽性を容赦なく暴露したものである。

李贄は道学家の「天理存りて、人欲を滅す」という虚偽の説教を暴露すると同時に、さらに進んで「人必ず私あり」（「蔵書・徳業儒臣後論」）の観点を提出し、公然と功利の重視を宣言した。彼は董仲舒の「その誼（義と同じ）を正し、その利を謀らず、その道を明かにし、その功を計らず」という謬論を批判し、義のみを講じて利を講じないのは、説いても通ぜず、また存在せず、利がなければ義を講ずるに及ばないとすれば、義を講ずるの目的もまた利を講ずるためのものとなってし

まうと指摘した。

李贄は封建的礼教に強く反対し、特に孔老二の婦人蔑視の謬論を批判し、婦人と男子は才能と見識の上で同じであると指摘した。彼は、「長短ありと見れば即ち可というも、男子をこれを尽く長といい、女人をこれを尽く短といはば、またあに可か？」（「焚書・答以女人学道為見短書」）とのべた。同時に、李贄は道学家の「餓死の事は極めて小、節を失う事は極めて大」という説と寡婦の卓文君が司馬相如（西漢時代の人）と再婚したのを「淫奔」とする謬論に反対し、卓文君の「私奔」は「身を失う」ではなくて「身を獲る」（「蔵書・司馬相如」）ものと指摘し、自然の性に合っているとした。李贄のこれらの批判は、封建礼教の正統を擁護する観念への打撃として、重要な意義をもつものである。

儒法闘争は本来食うか食われるかの闘争である。耿定向を代表とする反動道学家は、何回も李贄に侮辱と迫害を加えたが、李贄は少しもおそれず、闘争を堅持したのである。彼は、「わが頭は断つべきも、わが身は辱しむべからず」（「続焚書・与耿克念書」）とのべた。このような勇敢に闘う精神は、まさに法家の良き伝統である。最後に、反動派はついに毒手を下し、「敢て乱道を倡し、世の誣民を惑す」の罪名で彼をとらえて監獄に入れ、迫害して殺し、彼の全部の著作を焼却させた。そして最大の「罪状」とは、「秦の始皇帝をもって千古の一帝となし、孔子の是非をもって拠るにたらずとなす」ということであった。これは極めて尖鋭な闘争であった。李贄は反動派に迫害されて死んだが、その進歩思想の影響は消滅しなかった。封建社会の没落が深まるにつれて、彼の尊法反儒の思想はますます先進的なひとつとに重視されるようになり、五四運動の時期になると、「打倒孔家店」の闘争において、当時の革命を要求するひとつとによって継承され発揚され、ひとつとの封建主義に対して進めていた闘争をはげましたので

あった。

指摘しておかなければならないことは、李贄はつまるところ地主階級の思想家であったということである。彼の儒家に対する批判は、なお不徹底なものであり、歴史上の法家に対する評価も、不正確で矛盾したところがある。哲学思想の上でも、彼は唯心論と仏教の影響を受けていた。特に李贄は、現実逃避的な消極思想をももっていた。これらは彼の階級と歴史的局限性を反映していた。

明朝の末年、土地集中は非常に重大な程度にまで達し、農民はますます没落して小作農となった。江南五府（蘇、松、杭、嘉、湖）地区においては、「田を有する者は十に一、人の佃作をなす者は十に九」といわれ、江南においては、「貧者は富人の田を佃し、歳にその租を輸す」という情況が普遍的となった。地主の小作耕搾取と封建政府の税の搾取はますます重くなり、地主階級と農民大衆との矛盾はいっそう深まり、農民蜂起と市民闘争はいたるところでおこり、ついに李自成を指導者とする明末の農民大蜂起となって爆発した。蜂起軍の提出した「均田免糧」のスローガンは、広大な農民の土地要求と封建搾取に反対する強烈な願望をあらわしていた。レーニンは、「“土地所有”と“土地切分”の思想は、うたがいなく地主権力を完全に打倒し地主の土地所有制を完全に消滅させるために闘っている農民の、平等を求める革命的願望の表現以外の何物でもない」（「ベルージンを記念する」）とのべている。李自成の農民蜂起軍は官僚、地主を殺し、土地を奪い、明朝の王公宗室は大部分が打倒され、彼らの擁していた田庄は農民に没収された。このような情況に直面し、各地の地主や豪族は、「綱常法紀、地を掃いて余なし」との末日の悲鳴をあげた。明末の農民蜂起が全国を席卷すると、李自成の蜂起軍も勝利を重ね、ついに北京城を攻略し、明王朝を打倒した。李自成の蜂起は「均田」「免糧」の革命思想により、人を食う程朱の理学を批判し、革命的

暴力で理学の擁護する封建秩序を打倒した。蜂起軍の北京占領後、なお考試制度を施行したが、八股文を廃止し、農民闘争の需要から標準を定めた。李自成の蜂起軍の反孔は、中国の勤労人民の反孔闘争史において輝かしい一頁をいろどっている。

1644年、明朝の山海関総兵であり、売国奴である呉三桂は清軍を関内に引入れて農民蜂起を残酷に弾圧し、満州族の貴族も農民蜂起の血の海の中に清王朝を建立した。

農民革命戦争の影響の下に、明末清初の進歩的思想家王夫之（1619—1692年）も法家思想を武器とし、大地主階級の支配集団とその尊儒反法思想に対して闘争を展開した。王夫之は封建独裁主義の腐敗政治を改革することによって、清兵の侵入に抵抗することを要求した。彼自身も抗清闘争に参加したことがあり、失敗後湖南省西部の石船山に隠れて著述に従事した。彼は、1つの時代にはその時代の規章制度があり（「一代之治、各その時による」、『読通鑑論』巻21）、夏朝の制度は商、周では行なわれず、周朝の制度も前代とは異なり、時代が変れば、その制度もそれにしたがって改変される（「更新して時に趨く」、『思問録・内篇』）とかがえた。彼は儒家の鼓吹する「殷の礼は周継ぐ」を批判し、前代の制度を固執して改めない因循守旧の思想を批判した。王夫之は、人類の歴史の発展は進化であり、物質文明と人民の品德は、後代がすべて前代にまさり、堯舜以前には、人類は禽獣と異らず、どのような称賛にあたいるものもないとした。これから出発し、彼はさらに道学家の、人類の歴史を一代は一代に及ばずとする（「古になずむこと高きに過ぎ、方今を菲薄する」、『読通鑑論』巻20）ような復古逆行論を批判した。彼は柳宗元の「封建論」の中の「勢」の概念を継承発展させ、「理」の概念を提出し、「勢」と「理」とを結合させ、理勢統一の観点を提出した。彼は「勢」とは歴史的発展の趨勢と考えた。彼のとくところの「理」とは実

際上歴史の固有の法則を指す。歴史の固有の法則と歴史的発展の趨勢は統一的なものであり、勢をはなれた理なく、理を表さない勢もないとする。

王夫之は歴史上の統一と分裂、郡県と分封の間の闘争の経験を総括し、だんこ国家の統一を擁護し、郡県制を擁護し、地方割拠勢力と封建的特権を弁護する儒家の分封論を批判する。彼は「読通鑑論」の中で、古代の部落割拠の時代には、万国併存し、政教は1つでなく、支配者が互に争奪しあい、人民の苦みは極点に達したが、周王朝にいたってはじめて「漸く合一の勢あり」、これは1つの進歩であったと指摘する。但し周朝が大きな割拠勢力を保存していたため、春秋戦国時代になると、また相互に攻撃しあい、政令も1つでない局面が形成されたとする。秦の始皇帝が分封を廃し、郡県制をしくにいたって、「中夏一王に統じ」、政権ははじめて画一され、人民の苦しみもはじめて減少したのであり、これは「天地の大変」だとする。以後、漢、唐、北宋、明朝と中国は統一された時代をむかえ、そのため経済と文化はすべて発展したとする。彼はまた、郡県制の実行により、世襲制度と貴族の特権が除かれ、民間の才能ある人が政治に参加できるようになったのであり、これは一大進歩であったと考えた。このため、彼は秦の始皇帝の中国統一の歴史的功績を高く評価し、柳宗元の「天下を公にす」ることは秦より始るとする思想を肯定する。尊孔派がすべて秦の始皇帝を「専制の暴君」とであると攻撃するのは、それによって地方の割拠勢力と封建的特権を弁護しようとするものである。王夫之は彼らの謬論を痛烈に批判した。王夫之はまた郡県制が分封制に代った歴史的必然性を哲学上から弁護し、郡県制が生まれたことは、「勢のおもむくところ」であって、阻むことはできないものであり、およそ歴史発展の趨勢に適合した新しい事物であれば合理的なものであると指摘する。彼は素朴な弁証法の観点から尊孔派の復古逆行論を批判した。

道学家の尊孔論との闘争においても、王夫之は彼らの尊儒反法の理論的基礎一唯心論と形而上学一を批判した。彼は程朱派の封建理学を批判したばかりでなく、王守仁派の心学をも批判した。王夫之は道学家たちの「理は氣に先んじて在り」との唯心主義の謬論を否定し、物質である「氣」が第1の性であり、「理」は「氣」の派生したものであり、「氣」によって存在するものであると指摘した（「氣は、理の依なり」、『思問録・内篇』）。王夫之は中国の歴史上傑出した唯物主義の思想家である。彼の道学唯心論に対する批判は、すなわち孔学に対する批判である。彼は「六経われを責めて生面を開く」とのべているが、それは、孔孟の経書のそくばくを打破しようとするならば、旧い伝統を批判する闘争の中で新しいものがうちたてられなければならないということである。王夫之の尊法反儒思想は、近代に至るまでブルジョアジーの革命的民主派によって継承され、封建的圧迫と民族的圧迫に反対する彼らの思想的武器の1つになったのである。

王夫之は明末の李自成・張献忠の指導した大規模な農民蜂起を目撃し、歴史上の多くの農民蜂起が封建王朝の支配を動揺させ、打倒した教訓にも多くの注意をはらった。彼は、農民蜂起が、「一夫竿を揚げて天下響應す」という局面をつくり出したのは、土地集中（「大いに聚る」）によって「均しからざる」がつくり出されたためであると考え、「天下を平ぐものは天下を均くするのみ」（『詩広伝』巻4）とのべて、土地集中の抑制を主張した。彼は政治経済の制度上一連の改革を行い、支配の危機を救うべきだと提案した。このように、王夫之の尊法反儒は、まさに農民戦争の圧力によるものである。しかし、蜂起軍が彼を農民政府に参加することをうったえたとき、彼は拒絶している。このことは彼の階級的限界の表現である。

清王朝の建立以後、社会の経済と文化はともに発展を見せた。明清の交代期に、各民族間の联系

と経済文化の交流が強まり、多民族統一の国家はいっそう強化し発展する方向があらわれた。西方の早期植民地主義者の略奪と帝政ロシアの領土拡張に当面するようになると外からの侵略に反抗し、多民族国家の統一を擁護することは、各族人民の共同の願望となった。

清朝の康熙帝玄燁は、比較的有能な政治家であった。中国の統一と帝政ロシアの侵略への抵抗の面で有益な貢献をなした。康熙は1673年（康熙12）より8年間の戦争を経て、平西王呉三桂

（明の降将、雲南に駐す）、平南王尚之信（明の降将尚可喜の子、広東に駐す）、靖南王耿精忠（明の降将耿仲明の子、福建に駐す）の3つの分裂割拠勢力を平定し、統一をまもった。民族英雄鄭成功がオランダ植民地主義者を追い払い、中国の領土台湾を回復した後、康熙は1683年に鄭成功の孫の鄭克塽の手から台湾を統一し、台湾に行政機構を建て、東南の海防を強化した。後に、またジュンガル部の貴族の青海、新疆および西藏地区における分裂反乱活動を粉砕し、西北、西南辺境地区に対する管理を強化した。このように、中国の多民族統一の封建国家をいっそう強化した。帝政ロシアの侵略拡張に対し、康熙は抵抗政策をとった。黒竜江とウスリー江の流域は古くから中国の領土であった。17世紀の中葉に帝政ロシアの植民地主義者は中国の黒竜江流域に侵入し、さらに中国の領土ヤクサ等の地に城堡をきずき、侵略進行の拠点とした。康熙は1685年に2回にわたって兵を出し、帝政ロシアの侵略者を破った。帝政ロシアは幾度も失敗したのち、はじめて清朝政府との交渉に同意した。1689年（康熙28）、中露双方は「ネルチンスク条約」に調印し、額爾古納河、格尔必齊河、外興安嶺に沿って海に至るまでをもって境界とした。嶺南の土地、河流は中国に属し、嶺北の土地、河流はロシアに属した。それは法律上黒竜江とウスリー江の流域が中国の領土であることをみとめ、国家主権と領土を完全

に擁護した。いま、ソ修の新ツアーは古いツアーの中国侵略を懸命に弁護し、さらに軍事的遠征を行い、中国の領土を侵略した古いツアーを「被害者」であるかのようにいいふらし、古いツアーがわが国の黒竜江、ウスリー江流域を占領したのを「失地回復」であるかのようにのべている。このことは新ツアー社会帝国主義の本質と侵略の野心を完全に暴露している。新ツアーは古いツアーの衣鉢をつぎ、古いツアーよりもさらにみじめな失敗をなめるであろう。

但し康熙はつまるところ封建社会末期の帝王の1人であり、彼は広大な人民に対して残酷な搾取と圧迫を行ったばかりでなく、漢族地主を籠絡するためと広大な農民への支配を強化するため、尊孔を提唱し、孔老二に「万世の師表」の匾をかかげ、朱喜に対して、「功最宏巨となす」などと表彰したが、これらは否定しておかねばならない。

康熙以後、清朝の封建支配者はますます反動、腐朽化した。当時の一連の進歩思想家、政治家、文学家はいずれも腐朽した封建制度を暴露し、封建的な綱常・名教を批判し、宋明の理学を批判した。たとえば傑出した文学家の曹雪芹は、「紅樓夢」のなかで、封建社会の衰退の状況を深刻に暴露し、封建的礼教打破の要求を提出し、また封建支配を擁護する孔孟の道の反動性と腐朽性に対し、暴露と批判を進めた。

戴震（1723—1777年）はこの時代の著名な唯物論者であり、宋明理学を劇的に批判した進歩的思想家であった。当時清朝は高圧を行い、おおいに文字の獄をおこすと同時に、煩瑣な考据学をおしすすめる、知識分子の思想をとじこめようとしたのである。彼は程朱派の孔学をするどく批判し、特に彼らの「天理存りて、人欲を滅す」の反動的説教を批判した。

戴震は、理と欲とは統一的で、欲は根本であり、人の欲望と作為をはなれては、いわゆる理も存在しないとされた（「欲なければ為すなく、また理あ

らんや」(「孟子字義疎証」巻下)。彼は程朱らは「飢寒号呼」や「男女哀怨」を「人欲」とみなし、情欲を否定するものを「天理」としているが、その目的は「尊者」、「貴者」が「卑者」、「賤者」を圧迫するための理論的根拠を作り出すためのものであると暴露した。彼は程朱派のこのような反動理論は、「尊者」、「貴者」は理がなくても理があるようにし、反対に、「卑者」、「賤者」は理があっても理が無いようにするとのべている(尊者は理を以て卑を責め、長者は理を以て幼を責め、貴者は理を以て賤を責め、失すると雖も、これを順という。卑者、幼者、賤者は理を以てこれを争い、得ると雖も、これを逆という)、「孟子義疎証」巻上)。このようでは、反動支配者はいつでも「理」によって人民をおさえつけ、種々の罪名を人民の頭上に加えるのであるが、「卑者」、「賤者」は主張することも、反抗することもできなくさせられる。これに対し、載震は、程朱の理学のいわゆる「天理」、「人欲」の説教は、まったく「忍にして残殺の具」(「孟子字義疎証」巻下)と指摘している。彼は怒りをこめて、「人は法に死すも、なおこれを憐む者あり、理に死すれば、誰をかこれを隣まん」(「孟子字義疎証」巻下)とのべている。すなわち、だれか法を犯して刑死したとしても、だれかが憐みを表すが、「三綱五常」の封建的礼教によって殺されたとすれば、憐みを示すものは

誰もいないということである。礼教の残酷さは、刑法を超えているのである。載震は封建反動支配者の「理を以て人を殺す」(「東原文集」巻9)の罪行を暴露し、「理を以て人を殺す」ことは「酷吏の法を以て人を殺す」こと以上に陰険であり、残忍であることを暴露したのである。

載震の「理を以て人を殺す」の暴露と訴えは、当時の市民階層の要求を一定程度反映していた。同時に載震は、人民がたちあがって反抗するのは、その根源はすべて支配者にあり(「乱の本、鮮かに上の成ならず」、「原善」下)、支配者の「涼徳」(徳を行はざること)や、「暴虐」によりおこったものであるとした。そして、もし人民がたちあがって反抗するのが、人民の「不善」によるものとするならば、きわめておかしい(「大惑」)なことであるとした。このことは、載震は当時の人民の反抗闘争の正統性に対し、一定の認識をもっていたことを反映している。載震のこのような思想は、ひとびとの思想を解放し、人民を激励して封建礼教と闘争するのに、進歩的な意義を有していたのである。但し載震はつまるところ地主階級の知識人であり、彼の思想は大きな限界があり、彼の提唱した考拠学も、反動支配者に利用されたのである。

(つづく)

(27ページよりつづく)

を含めて進歩と解放をめざしてたたかっている世界各国人民にとって大きな励ましである。「アルバニア労働党史」完訳にさいして中国・アルバニア

の団結とその深化の意義をあらためて深く学び、日本人民の闘争の発展に役立てることができれば幸いである。(日本アルバニア友好協会理事長)